

『沈黙』における司祭の変容

－「基督の顔」の変化を中心に－

朴 賢 玉*

目 次

1. はじめに
 2. 「司祭」のイメージ
 3. 「司祭」における「基督の顔」
 4. 「司祭」が見た日本信者のキリスト教の受容
 5. まとめ
-

1. はじめに

『沈黙』（1966年新潮社）は、谷崎潤一郎賞を受賞した当時、評論家からの非難が多かった。その非難は、「神の声」が語られている場面向けられている。司祭が踏絵を踏むとき、「神の声」を聞いてから踏絵を踏んだということは、司祭の棄教が神によって「正当化」されることになるからである。大岡昇平は、「谷崎賞選後評」で「今年度最大の問題作」と述べている¹⁾。しかし、『沈黙』の背景になっている長崎周辺の教会では、その「神の声」よりも作中に描かれる「司祭」に対する問題が非難の的になっている。それは『沈黙』における司祭像が権威と威厳のない姿で描かれているからである。

これまでの研究では、「日本のキリスト教に対する本質的な問題」を明らかにしたことは作品の最大の功績だと粕谷甲一は指摘するが、同時に彼は、司祭が「神の声」を聞いて棄教したことについては、「この転びを義とする根拠」とであると評した²⁾。また、『沈黙』を英

* 名古屋大学大学院博士後期過程 日本近現代文学。

1) 三島由紀夫・大岡昇平 (2002) 『近代文学作品論集成二〇—遠藤周作『沈黙』作品論論集—』、クロス出版、58-63頁

語の「サイレンス」として翻訳したウィリアム・ジョンストンは「序」の中で「二人の司祭の宗教的信仰は挫かれてしまったのではなくて、彼等の社会的信仰が異文化に接触することによって、消滅してしまった」と指摘した³⁾。そのほか、山根道公が遠藤文学において「司祭」というモチーフがどのようにして作品に反映するようになったのかを作家論を通して明らかにしている⁴⁾。

本稿では、『沈黙』において司祭というモチーフがどのように描き出されているのかに注目する。そして、『沈黙』に描かれている基督の顔の変化を通して司祭の変容を分析する。そのうえ、『沈黙』においてキリスト教がどのように受容されているのかを考察する。

2. 「司祭」のイメージ

『沈黙』において司祭は、「宣教師」として福音を伝播する聖職者として描かれている。宣教師は、「まえがき」の冒頭で描かれているように「ポルトガルのイエズス会」の司祭たちである。『沈黙』における司祭フェレイラの目的は、キリスト教を宣教することであった。

しかし、『沈黙』に描かれた司祭フェレイラとロドリゴは棄教することになる。その二人の棄教を通して司祭のイメージがどのように描かれているのかを見てみたい。作品に最初に登場する司祭はフェレイラである。

ローマ教会に一つの報告がもたらされた。ポルトガルのイエズス会が日本に派遣していたクリストヴァンフェレイラ教父が長崎で「穴吊り」の拷問をうけ、棄教を誓ったというのである。この教父は日本にいること二十数年、地区長という最高の重職にあり、司祭と信徒を統率してきた長老である⁵⁾。(183頁)

冒頭部分では司祭フェレイラを権威のある聖職者として設定し、その司祭が棄教したという衝撃的な報告を提示する。他の司祭もそうなりかねないと暗示しているのであろう。司祭クリストヴァンフェレイラ⁶⁾は、実在の人物であり、拷問にかけられてその五時間後に棄教した「司祭」である。遠藤は、この棄教した実存の人物クリストヴァン・フェレイラをモデルにして作品の全体的な枠組を設定した。しかし、棄教者としての内面はロドリゴを通して描かれる。直接フェレイラの棄教に対する内面を描写することは避けたのであろう。司祭の義務と

2) 粕谷甲一 (1966) 「『沈黙』について」、『世紀』、中央出版社、2-7頁

3) 鶴田欣也(1986) 「『沈黙』の評価—海外における遠藤周作」(『国文学、解釈と鑑賞—特集遠藤周作』) 至文堂、137頁

4) 山根道公 (2005) 『遠藤周作 その人生と『沈黙』の真実』、朝文社、220-259頁

5) 本文の引用は『遠藤周作文学全集 第二巻』、新潮社、二〇〇〇年による。

6) 片岡弥吉 (1979) 『日本キリタン殉教史』、時事通信社、440-441頁

役割は、ロドリゴの手紙を通して描かれている。司祭ロドリゴはヴァリニャーノ師から日本渡航を反対された時、「彼の地では信徒たちは今や司祭を喪って、一群の仔羊のように孤立しています。彼等を勇気づけ、その信仰の火種をたやさぬためにも、どうしても誰かが行くべきです」と司祭の義務を主張する⁷⁾。そして、司祭の役割について「我々、司祭は、ただ人間のために奉仕するだけのためにこの世に生まれてきたあわれな種族ですが、その奉仕が適えられぬ司祭は孤独でみじめなものがありますまい」と書いている。このような司祭の義務と役割がフェレイラとロドリゴにあたえられたのであった。

だが、ロドリゴは日本へ潜入してから、日本の信者たちが拷問にかけられ死んでいくことを見た後、「もし司祭という誇りや義務の観念がなければ私もまたキチジローと同じように踏絵を踏んだかもしれぬ」と告白する。また、ロドリゴはトモキ部落で、奉行所の役人へ選ばれた住民が踏絵を踏まないで部落民全体が、取り調べられるようになる、という話を聞いて「踏んでもいい。踏んでもいい」といってしまう。そして、「自分が司祭として口に出してはならぬ」ことを言ったと気づく。このような、ロドリゴの司祭像は、カトリック側から非難的になった。それは、ロドリゴが威厳のない弱い司祭像として描かれているからである。この司祭像に関して遠藤は、「『沈黙』についても一番非難攻撃を受けたところは、あの小説には神父の威厳を失わせる場面があるということでした」と言及している⁸⁾。

『沈黙』に描かれた司祭は、最初は威厳のある強いイメージであった。ところが、日本で宣教活動をしていくうちに変わっていく。ロドリゴにおける司祭像の変化は、日本での宣教生活を通しての内面的な葛藤からはじまる。それは、イエズス会で教わった信仰と現実との差異を経験するようになるためである。司祭ロドリゴが直面した現実には、厳しかった。彼は自分が踏絵を踏まなければ、自分の代わりに信者が殺されるという試練に直面する。これが、司祭が教会と現実の間で板挟みにされたために生じた葛藤である。教会の制度が現実の状況と衝突する。教会の制度に従い、役人に殺されることで殉教という形をとりたいが、現実にはそれが許されず、見代わりに信者が殺されてしまう。自分は助けるために日本にきたが、反対に彼らを苦しめる結果を招くという現実と直面するのである。司祭にとって、自殺は教会の制度の中では禁止されているので、自ら死ぬこともできない状況である。つまり、二重の残酷な板挟みなのだ。

このように、ロドリゴを追い詰めていくのは井上筑後守である。彼は切支丹信者であったが、棄教した。したがって、彼は教会制度の中での「司祭」の意味を正確に見抜いていたのであろう。「司祭」が棄教をすることは、教会社会の中の汚点であると同時に教会から捨

7) 遠藤周作(1977)は『沈黙』の初版のあとがきに、ロドリゴについて「小説のモデルである岡本三左衛門について、本文の岡田三左衛門はロドリゴとちがって彼は(本名、ジュゼッペ・キャラ)シシリヤ生まれ、フェレイラ神父を求めて一六四三年六月二十七日、筑前大島に上陸し…」と述べている。キャラ神父も穴吊りの拷問にかけられて棄教した。彼の生涯は『走馬燈』に詳しく描かれている。『走馬燈』、毎日新聞社、99-103頁

8) 遠藤周作、『私にとって神とは』、光文社、131頁

てられることである。こうした過酷な状況の中でロドリゴは井上筑後守から棄教を迫られている。遠藤は、このような司祭ロドリゴの心理について、役人の言葉を通して「お前は彼等より自分が大事なのだろう。少なくとも自分の救いが大事なのだろう。お前が転ぶと言えればあの人たちは穴から引き揚げられる。苦しみから救われる。それなのにお前は転ぼうとはせぬ。お前は彼等のために教会を裏切ることが怖ろしいからだ」と表現している。ここでは、役人がロドリゴを追い詰めているように見えるが、実際は棄教者としての人生の辛さを予感した司祭自身の心情が露わにされているのではないだろうか。さらに、役人はロドリゴにイエスが今の状況に置かれたら「基督は転んだだろう。愛のために。自分のすべてを犠牲にしても」と追いつめていく。

ロドリゴは、「ヨブ」を思い浮かべながら、「こんな試練の日、癩を病んだヨブのようになお、神を讃えるということは、どんなに困難なものだろうか」といいながら自分の内面の葛藤を独白する。このような、司祭の内面の葛藤は『旧約聖書』の「ヨブ」のイメージをふまえてとらえられている。『旧約聖書』に登場するヨブはどのような苦難を受けても、負けずに耐える。「ヨブ」は苦痛と不幸の中で暮らしながらも神に対する信仰を最後まで捨てなかった人物である。『旧約聖書』の「ヨブ」において、神は彼の信仰を確認するために、「ヨブ」にさまざまな苦痛と悲しみを与えるが、神に対する信仰を最後まで守る義人のイメージで描かれている。矢内原忠雄は、「神のヨブに対する信頼は、ヨブの神に対する信頼と同様又はそれ以上の強くあった」と述べた⁹⁾。

遠藤が「司祭ロドリゴ」を『旧約聖書』の「ヨブ」のようなイメージでアレゴリー化したのは、「ヨブ」がもっている象徴的な意味として神に対する絶対的な「信仰」の部分と「司祭ロドリゴ」と連結したからであろう。遠藤は、ロドリゴという「司祭」のイメージを描くにあたって、「宣教」と「奉仕」の部分に焦点をあわせていることを、本文を通して読み取ることができる。遠藤は司祭ロドリゴを通して、「司祭」として、行ってはならない自殺および司祭の「義務」を、「義務」という言葉を使わずに、聖書のヨブのイメージを借りながら描いている。これをふまえてみれば、ロドリゴが踏絵を踏んで棄教したのは、信者たちを救うためには仕方がなかった。「司祭」としての任務は果たしたが、教会と社会の中では捨てられる存在になる。ロドリゴは外面的な行為だけ見れば背教である。しかし、遠藤がロドリゴの姿を「私は人々に奉仕するために生まれてきた司祭でした」ということを描くことは、ロドリゴの踏絵の経験が司祭としての信仰に対する確認である同時に、「司祭」としてのアイデンティティを見出すことを意味するのではないだろうか。

『沈黙』は、「ヨブ」とロドリゴを重ね合わせて、司祭の内面の苦痛を象徴的に描き出していると思われる。このようにロドリゴは極限的な現実と直面して変化していくが、その内面的な変化は以下に見ていくように「基督の顔」のイメージを通して描かれている。

9) 矢内原忠雄 (1978) 『聖書講義Ⅷ (全八巻)』、岩波書店、22頁

3. 「司祭」における「基督の顔」

『沈黙』における「基督の顔」は、遠藤が長崎の一六番館で見た木版の「踏絵」がモチーフになっている。遠藤は、踏絵の基督の顔のイメージを心に甦らせることによってこの「基督の顔」を描いている。このことは、遠藤が『沈黙』の「あとがき」で創作動機について述べているところに示されている¹⁰⁾。

数年前、長崎ではじめて踏絵を見た時から、私のこの小説は少しずつ形をとりはじめた。長い病気の間、私は摩滅した踏絵のキリストの顔と、その横にべったり残った黒い足指の跡を、幾度も心に甦えらせた。転び者ゆえに教会も語るを好まず、歴史からも抹殺された人間を、それら沈黙の中から再生させること、そして私の自身の心をそこに投影すること、それがこの小説を書き出した動機である。

『沈黙』における「基督の顔」は、二種類のモチーフとして描かれている。第一は、創作動機から明らかのように、遠藤にとって作品の原拠になっている「踏絵」の基督の顔である¹¹⁾。第二は、「聖画」の基督の顔である。「聖画」の基督の顔は、司祭ロドリゴが棄教に至るまで思い浮かべる基督の顔である。そして、ロドリゴが棄教する時、「踏絵の基督の顔」と対立することになる。このようにして遠藤は、司祭ロドリゴの内面の変化を「聖画」から「踏絵」の基督の顔への変化に投影して描いている。つまり、「基督の顔」はロドリゴの内面の変化を投影するモチーフなのである。遠藤の描く「基督の顔」は、司祭像の変化と同調して新しいイエス像を生み出し、埋もれ抹殺された棄教者の人生を再生させる仕掛けと言えるのであろう。先行研究には、この「聖画」の基督の顔に対する言及は見当たらない。

「聖画」に描かれた「基督の顔」はいかなる意味が含まれているのであろう。『沈黙』において最初の「基督の顔」は、ロドリゴが神学生の頃に見た「聖画」を基にして描かれている。

その顔はボルゴ・サンセポルクロに蔵されている彼の顔なのです¹²⁾。神学生の頃見たあの絵はまだ、なまなましく記憶に残っています。基督はその墓に片足をかけ、右手に十字架を持って、真正面からこちらを向き、その表情は、チベリアデの湖辺で使徒たちにむかい(中略)雄々しい力強い顔でした。(198頁)

10) 山根道公(1999)「解説一『沈黙』一」(『遠藤周作文学全集 第二巻 長編小説Ⅱ』、新潮社、338頁)

11) 遠藤の踏絵をめぐる創作動機と踏絵に関する史料の研究は、山根道公が『遠藤周作 その人生と『沈黙』の真実』の中で詳しく論じられている。注(4)に同じ。

12) 現在、イタリアのサンセポルクロの市立美術館が所蔵する。

ロドリゴは、澳門から日本へ行く直前、「聖画」に描かれていた「基督の顔」を思い浮かべる。その顔は引用文で見たように「雄々しい力強い顔」である。教会の中で見られる典型的なイエス像である。それは、威厳があり、強いイメージを持つ。遠藤は、「聖画」に描かれた基督のイメージを借りて最初の「基督の顔」を描き出している。作品の中で「聖画」の基督の姿について詳細に描写されているが、「聖画」に含まれている意味については語られてない。しかし、ここに描かれた基督の仕草から、これが『新約聖書』に語られるイエスの復活を描いた作品、「復活のキリスト」であることがわかる。基督の顔のモデルは、現在、イタリアのサンセポルクロ、市立美術館所蔵の「復活のキリスト」で、制作年代は一四六五年頃である。

「復活のキリスト」の絵は、司祭にとって、非常に重要な意味をもつ。この「復活のキリスト」の絵をロドリゴが頭に描いていることは、司祭としての強い自覚をもっていると読み取ることができる。基督の復活を信じることは基督教信仰を最も端的に表す行為である。つまり、ロドリゴが記憶している「基督の顔」には、彼の信仰の核心になっている基督の復活の意味が秘められているのである。このような、基督の生涯の一場面一場面を描いた基督の顔は、ロドリゴにとって「子供の時から自分のすべての夢や理想を託した顔」になっている。

ここで注目したいのは、ロドリゴの中で「復活のキリスト」として描かれていた基督の顔が棄教に至る場面で消え去り、踏絵に刻まれた基督の顔を通して新しい基督の顔が発見されることである。「基督の顔」は、ロドリゴが日本に潜入してから変化し始める。その変化はロドリゴが持っている基督のイメージも映し出すと同時に、ロドリゴの内面を投影していくものになる。

まず、ロドリゴが日本へ潜入し、基督の顔を思い浮かべるのは、モキチとイチゾウが死んだ後、トモギ村から離れ、無人の部落と山の中とを放浪する時である。ロドリゴは「一人の男の顔が――疲れ凹んだ顔がそこに浮かんできました。なぜ、私はこういう時、別の男の顔を思うのか」と語る。それまで、ロドリゴは画家たちに描かれ続けて来た基督の顔については「人間のすべての祈りや夢をこめて、その顔をもっとも美しく、もっとも聖らかに表しました」と述べながら、「おそらく彼の本当の顔は、それ以上に気高かったに違いありません」と語ってきた。しかし、この時ロドリゴが思い浮かべた基督の顔は、「泥と髭とでうすぎたない汚れ、そして不安と疲労とですっかり歪んでいる追いつめられた男の顔」であった。この「疲れ凹んだ顔」には、モキチとイチゾウの死に直前した、彼の心の動揺が示されているのではないだろうか。

その後、ロドリゴが、キチジローの密告によって捕えられた時、思い浮かべる基督の顔は、再び、手紙で書いているような美しい顔である。ロドリゴは基督の生涯を考えながら、「山上で群集に説教する基督の顔、ガリラヤの湖を黄昏、渡る基督の顔、その顔は拷問にあった時さえ決して美しさを失ってはいない。やわらかな、人の心の内側を見ぬく澄んだ眼がこちらをじっと見つめている」と基督の顔を思い浮かべる。また、「碧い、澄んだ眼がいた

わるように、こちらを見つめ、その顔は静かだが、自信のみち溢れている顔」を思い出す。このように、ロドリゴを通して見られる「基督の顔」は、「雄々しい力強い顔」や「美しい顔」とイメージが変化する。ロドリゴは日本信者の死と宣教の厳しさを経験するが、「決して美しさを失っていない」基督の顔を思い浮かべる。美しく「美化」された基督の顔が、司祭に甦るのである。

ところが、ロドリゴは同僚司祭のガルペと日本の信徒が死んでいくのを見た時、「死ぬばかり苦しみ、汗、血の雫の滴った」という基督の受難と重ね合わせとするが、基督の顔は遠いもののように感じられる。この時ロドリゴは自分が「美化」した基督の「うつくしい顔」を甦らせることができなかった。ガルペが死んだ後、ロドリゴは「神は海の上でただ頑なに黙りつづけていた」と考え、イエスの「エロイ・エロイ・ラマ・サバクタニ（なんぞ、我を見捨て給うや）」と言う言葉が「神の沈黙への恐怖から出たものだとは思ってはいなかった。神は本当にいるのか。もし神がいなければ」と疑問を持つ。つまり、ガルペと日本の信徒の死に際して、「美しい」基督の顔を蘇らなかつたことが、ロドリゴに神の不在を考えさせたと言えるのである。

その後、ロドリゴは、日本信者たちが自分のせいで、拷問にかけられ死んでいくのを見て、結局棄教することになる。その時、ロドリゴが見た「基督の顔」は、踏絵の基督の顔であった。

踏絵は今、彼の足もとにあった。小波のように木目が走っているうすよごれた灰色の木製の板に粗末な銅のメダイユがはめこんであった。それは細い腕をひろげ、茨の冠をかぶった基督のみにくい顔だった。黄色く混濁した眼で、司祭はこの国に来てから始めて接するあの人の顔をだまて見おろした。（中略）司祭は足をあげた。足に鈍い重い痛みを感じた。それは形だけのことではなかつた。自分は今、自分の生涯の中で最も美しいと思ってきたもの、最も聖らかと信じたもの、最も人間の理想と夢にみたされたものを踏む。この足の痛み。その時、踏むがいいと銅板のあの人は司祭に向かって言った。踏むがいい。お前の足の痛さを私が一番よく知っている。（218-219頁）

ロドリゴが棄教する前に思い浮かべた「基督の顔」は青い眼の美しい顔であった。しかし、棄教する直前想像した「基督の顔」は、踏絵に刻まれた「基督のみにくい顔」で、「黄色く混濁した眼」の顔であった。この時ロドリゴは、日本に来てはじめて接した「基督の顔」であると語る。ロドリゴが踏絵を踏む前に見た基督の顔は、美化された「雄々しい力強い顔」ではなく、「黄色く混濁した眼のみにくい顔」である。つまり、彼は日本の布教の中で極限状況の経験を通して「黄色く混濁した眼」の基督の顔を発見したということである。

さらに、遠藤はこの「基督の顔」の変化を通して「司祭像」の変容を生み出している。笠井秋生は、ロドリゴにおける基督の顔の変化を通して転換されるキリスト像は、「彼のキリスト像が<父の宗教のキリスト>から<母の宗教のキリスト>への転換」であり、それは

「遠藤のキリスト像の転換」を意味していると述べている¹³⁾。確かに、笠井の指摘のようにロドリゴの基督の顔の変化を通して転換された基督像は、「遠藤のキリスト像の転換」である。しかし、注目すべきことは、ロドリゴが日本で初めて実際に見た基督の顔が「碧い眼」ではなく、「黄色く混濁した眼」の基督像であったということである。

日本における「黄色く混濁した眼」のみにくい顔は、ただ、基督教像の眼が黄色いということの意味するだけではなく、苦境に立たされた日本人の心情を表象する。だが、この「黄色く混濁した眼」の基督の顔への変化について、遠藤はカトリックの人々から一番批判されたと述べながら、次のように言う¹⁴⁾。

教会が考えていた「キリストの顔」というのは、威厳があって、立派で、美しい「キリストの顔」です。(中略)イメージです。しかし彼が日本ではじめて見たイエスの顔はそういう顔ではなかった。踏絵にある、疲れきって、くたびれて、消耗していたイエスだった顔なんです。「そういう私だから、おまえは、踏んでかまわないのだ」と、その顔は言った。「顔」の変化ということ。(196頁)

つまり、この「顔」の変化とは、ロドリゴが抱いてきたイメージと、日本で彼が実際に目にした基督の顔の隔たりは、「くたびれて、消耗して」いた、力ない、弱い「基督像」の変化を表している。「黄色く混濁した眼」には、葛藤や迷いとといった、明らかに見えないという意味が読み取れる。それは、今まさに、司祭ロドリゴの心なのだ。ロドリゴは、確かに典型的な司祭の姿ではない。だが、ロドリゴを通して描かれた人間的な弱さは、一般読者にとっては共感を抱く箇所である。この作品に描かれる人間的弱さが弱者の共感を呼んだことに関しては、別稿に述べた¹⁵⁾。

ロドリゴが思い浮かべていた基督の顔は、理想的で美しく「美化」されたものであった。ロドリゴの日本での布教は、その「美化」された顔に支えられていたのである。しかし、棄教する直前にロドリゴが見た「黄色く混濁した眼」の基督の顔は、理想ではなく、彼が現実の中で自覚した基督像だと言えるのである。

4. 「司祭」が見た日本信者のキリスト教の受容

司祭ロドリゴが思い浮かべる基督の顔の変化を通して、司祭の内面の変容が描かれて

13) 笠井秋生 (1987) 『遠藤周作論』、双文社、158頁

14) 遠藤周作 (1979) 「三好行雄・遠藤周作の対談「文学—弱者の論理」」(『遠藤周作の研究』、実業之日本社、196頁

15) 拙稿 (2007) 「『沈黙』における「挫折」—一六〇年代後半から七〇年代における『沈黙』の受容を中心に—」『キリスト文芸』、第23輯、19—36頁

いる事を見てきた。本節では、司祭ロドリゴが見る日本信者の姿を通して、基督教の受容について見てみたい。遠藤は作品で踏絵を通して切支丹信者の苦悩を描き出している。踏絵は切支丹信者たちにとって精神的な拷問である。『沈黙』は歴史資料を基に描かれており、作中には「拷問」についての詳しい描写がある。「拷問」には、肉体的な苦痛を与えるものと、踏絵のような精神的な苦痛を与えるものがある。

『沈黙』に描かれた踏絵には聖母と基督像が刻まれている。日本信者に踏まれる踏絵には聖母が刻まれ、司祭に踏まれる踏絵には基督像が刻まれている。

まず、司祭ロドリゴが見る日本信者は、聖母をどのように受け止めているのであろう。ロドリゴは日本信者を見てつぎのような疑問を感じている。

もう一つ注意しなければならないことは、トモギ村の連中もそうでしたがこの百姓たちも私にしきりに小さな十字架やメダイユや聖画を持っていないかとせがむことです。そうした物は船の中にみな置いてきてしまったと言うと非常に悲しそうな顔をするのです。私は彼らのために自分の持っていたロザリオの一つ一つの粒をほぐしてわけてやらねばならなかったのです。こうしたものを日本の信徒が尊敬するのは悪いことではありませんが、しかしなにか変な不安が起きてきます。彼らは何かを間違っているのではないのでしょうか。(215-216頁)

これは、踏絵に刻まれている聖母と関わりがあるといえるだろう。ロドリゴは、日本で神より聖母のほうが優先されているような状況を見て、疑問を持つが、それ以上追求はせず忘れてしまう。しかし彼が疑問に思っていた日本信者たちの聖母信仰は、印象的に描かれる。

「なら、更に言う通りのことをやってみよ」この踏絵に唾をかけ、聖母は男たちに身を委してきた淫売だと言ってみよと命ぜられました。これは、やがてあとになってわかったのですが、ヴァリャーノ師が最も危険な人物と言われたイノウエが発明した方法でした。一度はその出世のために洗礼もうけたイノウエは、日本のまずい百姓信徒たちが、なによりもまず聖母を崇拝していることを熟知していたのです。実際、私もトモギに来てから、百姓たちが時には基督より聖母のほうを崇めているのを知って心配したくらいでした。(224頁)

ロドリゴは、日本信者たちがどれ程聖母を崇拝しているのかを直接経験するのである。彼は日本信者たちの聖母への思いを最初は「尊敬」と表現しているが、日本信者が踏絵を踏ませられる時、その反応を見て「崇拝」と判断する。この二つの表現は大きな異なる意味を含んでいる。聖母の場合は神ではないので「尊敬」の対象であるはずだが、それを日本信者は神のように「崇拝している」のである。遠藤は作品の中で基督教の受容がどのような形態で日本に根をおろしているのかという問題について聖母像に注目していると言えよう。つまり、日本において基督教が受容される際、イエスより聖母のほうが基督教の神として根をおろしていたということではないだろうか。ここには、「聖母」を通した日本信者の基督教の受容が表れている。

さらに、注目すべき点は、ロドリゴが踏んだ踏絵が聖母ではなくイエス像であるということだ。第二節で考察したように、踏絵の「イエス像」はロドリゴの基督教の布教を視点に描かれている。つまり遠藤は、踏絵というモチーフを基督教の受容の装置として設定し、踏絵に刻まれた「聖母」と「イエス像＝基督の顔」の二つの視点から日本における基督教の受容について問いかけるのである。そこには、遠藤が考えている日本における基督教に対するイメージが隠されている。日本信者に踏まれた踏絵の「聖母」は、遠藤が指摘する母性的な神を表象し、反面、ロドリゴに踏まれた踏絵の「イエス像」は父性的な神を表象するといえよう。このような、「聖母」を取り上げて母性的な神のイメージを描いている作品が『母なるもの』である¹⁶⁾。

また、ロドリゴを通して次のような特徴が見られる。先述したように、日本における基督教の受容を「聖母」という「聖画」を通して土着化しているのかと問い、その問いを日本信者の踏絵の場面を通して証明する。この場面の中には二つの鍵がある。第一は、司祭ロドリゴを通して、「聖母」に対するイメージを明確に「崇拜」の存在ではなく「尊敬」の存在として位置付けていることである。なぜなら、プロテスタントでは、カトリックが聖母を「尊敬」していることを、誤解し「崇拜」していると見る傾向が多いからである。

ホセ・ヨンバルトは、聖母マリアの信仰について、カトリックとプロテスタントが相違する点に、「プロテスタントはキリストが聖母マリアから生まれた事実は認めているが、それ以上は認めない。しかし、カトリックからは聖母マリアを基督の母として大切にしているところが違う」と述べている。ホセはカトリックが聖母マリアを大切にしていることについてプロテスタント側で誤解があると指摘する。それは「カトリックも聖母マリアを、神またはキリストのように拝むことはしません」ということである¹⁷⁾。言い換えれば、プロテスタントは、カトリックが聖母マリアを「崇拜」していると認識しているということだ。つまり遠藤は、ロドリゴの問いを通して、聖母マリアが「崇拜」の対象ではないと示している。第二は、遠藤は、日本における基督教の受容と土着化に対する問いに留まらず、その土着化の形態として現れている「聖画＝基督の顔」をテキストの上で形象し、作中人物の内面を表象するシンボリックなイメージとして、一

16) 遠藤は、隠れ切支丹信者が踏絵を踏んでから自分たちの「卑怯さと惨めさ」を嘔吐しながら部落にもどり、自分たちの体を打ったとする。それでも、後ろめたさが晴れない隠れ切支丹信者たちは、自分たちの弱さを聖母のとりなして許されるように祈ったのである。つまり、信者たちは聖母に対して、自分たちを許してくれる母のような神の存在を求めているということである。遠藤周作『最後の殉教者・母なるもの』（講談社、一九七六年）。

17) ホセ・ヨンバルト（1986）は、聖母マリアのカトリックの教えについて三つの概論を取り上げている。（一）諸聖人のなかで最も優れているかたは、神の御母、処女聖マリアです。それは、聖マリアがキリストの真の母として神の恩恵に満たされ、すべての聖人と天使にまさる地位を与えられたからです。（二）（一）のことから、聖マリアは原罪を免れ、原罪の結果である死の腐敗も免れ、地上での生活を終えた後は、その靈魂も体も天国に上げられました。（三）十字架にかけられた主イエズス・キリストが、使徒ヨハネに向かって、「これはあなたの母です」と言ったとき、聖母マリアはキリストの意志と恵みによってすべての信者の靈的な母にされた。『カトリックとプロテスタント—どのように違うか—』、サンパウロ、83頁

般読者に基督教文学を受容できるようにしている点だろう。

こうした、「聖画＝基督の顔」の形態は、遠藤が長い時間をかけ、苦勞して作り出した基督教の表象である。遠藤は母から着せられた「洋服＝基督教」について「私にとっては身によく合わない洋服」であるが「母から与えられたものを捨てるのは親不孝になる・・・このキリスト教を日本人の身体に合った和服にしてみよう」と語っている。そして次のように述べている¹⁸⁾。

国によって食べ物がちがうように、着る物がちがうように、言葉がちがうように、みんなには共通しているけれども、その形において異なっている物がある。その形というものが、私は非常に大事だと思う。だから、本質はちがわなくても、形の変化ということ、それが私の仕事だったと言っても良いと思います。

これは、先述した「基督の顔」である。作品は「踏絵」の中で共通の要素を含んでいる。その共通要素は人間の心の状態によって変わる「基督の顔」であろう。人間の心の状態によって「基督の顔」は様々に見える。これは絵画の見え方が人によって異なるのと同じである。しかし、実際の基督は変わらない。基督の本質そのものである神自身は変わらないからである。遠藤は、棄教した司祭の人生を通して「聖画」の中で描かれた「基督の顔」から棄教に至るまでの「基督の顔」の形態を多様な変化によって描いている。このようにして遠藤が描いた「基督の顔」の変化は、基督教を日本人の身体に合う神のイメージとして仕立て直したうえに発見した母性的な神の姿を表象である。

遠藤は、日本における基督教のイメージについて「明治維新後、日本へ持ってきたキリスト教というのは、アメリカン・プロテスタンティズムです。それから多くの日本人がキリスト教を知ったのは、ロシア文学からです。たとえば、トルストイの禁欲主義——肉欲は罪というような考え方でキリスト教を知るようになりました。だから日本人の多くは、キリスト教はものすごく狭き門の宗教という考えを持っています」と指摘している¹⁹⁾。さらに、内村鑑三によって基督教に対するイメージが厳父のイメージで文学者に伝えられたのを批判しながら、キリスト教は「厳しい面と同時に、ものすごく寛大な面」も持っていると紹介しながら厳父の裁きのイメージのキリスト教は日本に根付かないという考えを述べている。

このような神のイメージを、遠藤は司祭の棄教を通して新たに作り出した。その新しい神のイメージは、罪を裁くことではなく、許しを与える寛大な存在として描かれている。カトリック教

18) 遠藤周作 (2002) 『自分をどう愛するか』、ブライム通光、218頁

19) 遠藤(1988) 日本人の持つキリスト教のイメージについて、これ以上に、「裁きの宗教、罪をいつも強調する宗教、厳格で暗い宗教というイメージが重なってきて、どうもうっといわけなんです、それでもそのうっといさをはねのけて信仰するようになった人は、大変な変人か、立派な人かだと思っています」と語っている。そして、日本人の感覚に合うキリスト教のイメージは「母のイメージ」であると述べている。『私にとって神とは』、光文社、118頁

会では、棄教司祭のイメージが司祭像としてふさわしくないという非難一方で、弱者に対する神の寛大なイメージは、神に対する新しい認識を読者に与えたのであろう。そのために、作品は神の穏やかなイメージに至るまでの司祭ロドリゴの対立と、キチジローの臆病者としての姿を内面深くまで描いたとも考えられる。

『沈黙』が読者から共感を得たのは、作品に描かれている作中人物を通して自分たちの姿を照らし合わせながら、ある解放感を感じたためではないだろうか。言い換えれば、基督教信者にとって、今までの教会での神のイメージは厳しく、怖いイメージばかりであった。しかし、作品に描かれたロドリゴとキチジローの姿を通して見られる基督のイメージは、許しを与える慈悲深い神として現れているのである。そして、『沈黙』において棄教者であるロドリゴとキチジローは弱者として、「踏み絵を踏むときの足の痛みは、弱虫としての痛みでもあり、裏切り者としての痛みもある」という。遠藤文学の特徴は、このように罪を許す神のイメージと棄教者の孤独な人生の描写の詳述にある。

遠藤は基督教＝服というアレゴリーについて「和服にうまく仕立てられたかどうかということ、私の本の読者の方が決めて下さる問題」であると述べている²⁰⁾。遠藤文学における、『沈黙』は、御仕着せの洋服であった基督教を日本人に合う和服に仕立て直した作品として位置づけられるのである。

5. まとめ

『沈黙』に描かれた最初の基督の顔は、「聖画」を通して「雄々しい力強い顔」の強者のイメージであった。しかし、最後に、司祭ロドリゴは日本に来てはじめて見た基督の顔に「黄色く混濁した眼のみにくい顔」を見出している。ロドリゴがいままで思い浮かべた基督の顔は理想的で美しく「美化」された基督像であった。そのイメージに支えられながら、ロドリゴの布教は進められた。しかし、ロドリゴが棄教する直前に見た「黄色く混濁した眼」の基督の顔は、彼の抱くイメージとは異質なものであった。それは、彼が現実の中で感じて、自覚した基督像なのだ。そして、遠藤はその司祭の踏絵に刻まれた「基督像」と日本信者の踏絵に刻まれた「聖母像」を区別する。そこに、日本での基督教の受容のひとつの形態として「聖母像」が大きな役割を果たしたことを示している。

遠藤は『沈黙』での「司祭像」の変容を通して、繰り返し「基督の顔」を描いていき、さらに踏絵の場面では、民とともに苦しみ、弱さを見せるキリストを描くことによって、西洋のキリスト教を遠い存在ではなく、見近なものとして読者に認識させていった。このように『沈黙』という作品は、日本に西洋のキリスト教を根付かせる役割を果たしていったと考えられるのである。

20) 注 (18) に同じ。218頁

【参考文献】

- ・ 遠藤周作 (1999) 『遠藤周作文学全集 第二巻』、新潮社、テキスト
- (1977) 『走馬灯』、毎日新聞社、99-103頁
- (1988) 『私にとって神とは』、光文社、131頁
- (1993) 『自分をどう愛するか』青春出版社、218頁
- (1979) 『遠藤周作の研究』、実業之日本社、196頁
- ・ 片岡弥吉 (1979) 『日本キリシタン殉教史』、時事通信社、440-441頁
- ・ 笠井秋生 (1987) 『遠藤周作論』、双文社、158頁
- ・ 三島由紀夫・大岡昇平 (2002) 『近代文学作品論集成二〇——遠藤周作『沈黙』
作品論集——』、クレス出版、58-63頁
- ・ 山根道公 (2005) 『遠藤周作 その人生と『沈黙』の真実』、朝文社、220-259頁
- (1999) 『遠藤周作文学全集 第二巻 長編小説Ⅱ』、新潮社、338頁
- ・ 矢内原忠雄 (1978) 『聖書講義Ⅷ (全八巻)』、岩波書店、22頁
- ・ 粕谷甲一 (1966) 『世紀』、中央出版社、2-7頁
- ・ 鶴田欣也 (1986) 「『沈黙』の評価—海外における遠藤周作」、『国文学、解釈と鑑
賞—特集遠藤周作』、至文堂、137頁
- ・ 朴賢玉 (2007) 『沈黙』における「挫折」—六〇年代後半から七〇年代における『沈
黙』の受容を中心に— 『キリスト文芸』、第23輯、19-36頁
- ・ ホセ・ヨンバルト (1986) 『カトリックとプロテスタント—どのように違うか—』、サンパウロ、83頁

要 旨

本稿では、『沈黙』に描かれている基督の顔の変化に注目し、その変化を通して司祭の変容について分析した。またその上で、『沈黙』においてキリスト教がどのように受容されているのかを考察した。

『沈黙』に描かれた司祭像は、最初は教会の権威を象徴するイメージであった。しかしながら、最後は弱い司祭像に変容する。その「司祭像」の変容は「基督の顔」を通して生み出されている。つまり、ロドリゴがいままで思い浮かべた基督の顔は理想的で美しく「美化」された基督像であった。しかし、棄教する直前にロドリゴが見た「黄色く混濁した眼」の基督の顔は、理想から作られた基督像ではなく、現実で彼が感じて自覚した基督像である。そして、遠藤はその司祭の踏絵に刻まれた「基督像」と日本信者の踏絵に刻まれた「聖母像」を区別する。そこに、日本での基督教の受容のひとつの形態として「聖母像」が大きな役割を果たしたことを示している。西洋におけるキリスト教では、聖母は尊敬する存在であり、崇拜の対象は神である。

遠藤は『沈黙』において「司祭像」の変容を通して、繰り返し「基督の顔」を描いていき、さらに踏絵の場面では、民とともに苦しみ、弱さを見せるキリストを描くことによって、西洋のキリスト教を遠い存在ではなく、見近な存在として読者に認識させたのであろう。『沈黙』という作品は、日本に西洋の基督教を根付かせる役割を果たしていったと考えられるのである。

キーワード：司祭、聖画、基督の顔、聖母、司祭像の変容

투 고 : 2007.11.30

1차 심사 : 2007.12.08

2차 심사 : 2007.12.29

住 所 : (466-0806)愛知県名古屋市長和区西畑町 7-10 マゾン・ド・ジュディ306

電 話 : (+81) 52-764-6352

e-mail : lucia-1007@hanmail.net